

1927年(昭和2)五月一日、東京府北豊島郡日暮里町谷中本七八番地(現・荒川区東日暮里)に、父隆策、母きよじの八男として生まれる。兄二人は夭折、姉一人、兄五人がいた。1928年 弟隆生まれる。1931年 唯一の女兒であった姉富子が七歳で死去。1933年 カソリック系の神愛幼稚園に入園。1934年 東京市立第四日暮里尋常小学校(現・ひぐらし小学校)入学。三兄英雄、満州に出征。

掲載される。1941年 四兄敬吾、中国戦線で戦死、享年二三。一二月、肋膜炎を発病、病臥する。五兄健造、中国戦線に出征。1942年 小康を得て三年に進級。四月、物干し台で風をあげている折に東京大空襲のB25一機を目撃する。1943年 日暮里に父が新築した隠居所に弟と移る。1944年 勤労動員で日本毛皮革(株)で獣皮のなめし作業に従事。五月、肺浸潤と診断。母死去。1945年(昭和20) 病氣欠席が続くが、戦時特例で四年で繰り上げ卒業。教練の成績で進学できず。夜間空襲で家が焼失。浦安の長兄が経営する造船所に勤務。徴兵検査で第一乙種合格。終戦後、梅田町の紡績工場の社宅に移る。予備校・正秀英語学校に通学。父、がんで死去。1946年 兄健造復員。1947年 学習院高等科文科甲類に入学するが、秋頃より疲労と微熱で就学困難に。

1948年 結核が進み東大医学部分院で胸郭成形手術、左胸部の肋骨五本切除。1949年 栃木県奥那須で療養。1950年 健康回復し、学習院大学文政経学部に入學。文芸部に所属し、「学習院文芸」創刊号に放送劇「或る幕切れ」発表。第二号に短編「雪」発表。1951年 古今亭志ん生ら落語家を招いて、文芸部主催の古典落語鑑賞会を都合四回開催。1952年 「学習院文芸」を「赤絵」と改称、文芸部委員長に。川端康成の短編を筆写する。「赤絵」八号に「死体」発表、のち「青い骨」に収録。1953年 同人誌「環礁」に参加。大学中退、三兄英雄の紡績会社に入社。一月、文芸部員だった北原節子(津村節子)と結婚、池袋のアパートに住む。1954年 同人誌「炎舞」創刊。

誕生。丹羽文雄主宰の同人誌「文学者」に参加、休刊で小田仁三郎主宰の「Z」に参加。1956年 梶井基次郎の表現法に感銘を受ける。1957年 「Z」廃刊、「亜」を主宰。幡ヶ谷原町に転居。1958年 二月、最初の短編集「青い骨」(小壺天書房)を自費出版。「週刊新潮」6月30日号に「密会」掲載、初めて稿料を得る。「文学者」復刊、「亜」廃刊。1959年 「鉄橋」(「文学者」58・7月号)が第41回芥川賞の候補に(「文藝春秋」3月号に転載)。北多摩郡保谷町千駄山に家を新築し転居。「貝殻」が芥川賞の候補に。「密会」が日活で映画化される。1960年 長女千夏生まれる。1961年 織維関係の勤め先を退職。「文学者」編集長に。1962年 「透明標本」が芥川賞候補に。「石の微笑」(「文学界」4月号)が第47回芥川賞の候補に。1963年 次兄武雄の織維会

社に勤務。七月、短編集「少女架刑」(南北社)刊。

1964年 九月、最初の長編「孤独な噴水」を書き下ろす(講談社)。その取材でボクシングの試合を多く観戦。

1965年 津村節子、「玩具」で第53回芥川賞受賞。末兄の織維会社を退職。三陸海岸を一人旅。

1966年 長崎に滞在し、戦艦武蔵について調査(長崎へは一〇七回訪問すること)。「星への旅」(「展望」8月号)が第2回大宰治賞受賞、八月、短編集として筑摩書房より刊行。「新潮」9月号に一挙掲載の「戦艦武蔵」、同月新潮社より刊行、ベストセラーに。1967年 那覇に滞在し沖縄戦を調査。この頃から戦史小説を本格的に書き始める。六月、記録小説「高熱隧道」(新潮社)刊。

1968年 心臓移植調査のため初めての海外旅行に、南アのケープタウンなどへ。1969年 三鷹市井の頭の新

居に転居。一二月、「神々の沈黙」(朝日新聞社)刊。

1970年 「軍鶏」(「小説新潮」3月号)など、動物小説を多く執筆。三兄英雄が胃がんで死去。

1971年 短編集「雁」、「日本医家伝」「逃亡」など刊行。1972年 初めての長編歴史小説「冬の鷹」の連載開始。「深海の使者」で文藝春秋読者賞受賞。九月、最初のエッセイ集「精神的季節」(講談社)刊。1973年 戦争証言者の高齢化により戦史小説の執筆を終える。「関東大震災」などの記録小説により菊池寛賞受賞。1974年 足に激痛が走り、パージャヤ病と診断されるが、薬で快方へ。「冬の鷹」刊。1975年 「漂流」の調査で、高知、八丈島へ。1976年 「赤い人」「嵐嵐」執筆調査でしばしば北海道へ(札幌へは一〇〇回以上訪問すること)。「漂流」刊。1977年 念願の尾崎放哉を主人公とする「海も暮れける」

の取材で、京都から小豆島などへ。

1978年 「遠い日の戦争」の取材で、アメリカ兵を斬首した元陸軍将校二名に会って証言を得る。

1979年 「ポーツマスの旗」現地調査のためポーツマスへ。前年の「ふおん・しいほととの娘」で吉川英治文学賞受賞。1980年 弟隆、肺がんで片肺切除。「脱出」など、七編の短編を文芸誌に書く。「海も暮れける」刊。1981年 「漂流」が東宝で映画化。弟死去。歴史紀行「歴史の影絵」刊。1982年 短編を多く執筆。「問宮林蔵」刊。

1983年 慢性中耳炎の再発で手術。「破獄」刊。『魚影の群れ』松竹で相米慎二監督が映画化。

1984年 弟の死を主題とする初めての私小説「冷い夏、熱い夏」、「長英逃亡」刊。1985年 「冷い夏、熱い夏」が毎日芸術賞、「破獄」が讀賣文

学賞、芸術選奨文部大臣賞受賞。1986年 日本文藝家協会常務理事に。「海の祭礼」刊。1987年 日本芸術院賞受賞。長兄利男死去。「闇を裂く道」刊。

1988年 次兄武雄執筆の吉村一族の記録「雑木林」を私家版としてつくることに協力する。「仮釈放」刊。1989年(昭和64・平成元)短編集「海馬」刊。1990年 「吉村昭自選作品集」全15巻・別巻1巻の刊行開始(新潮社)。「桜田門外ノ変」刊。初めての外国語訳となる「ポーツマスの旗」が仏訳で出版される。

1991年 「白い航跡」「黒船」刊。

1992年 都民文化栄誉章、荒川区区民栄誉章受賞。

1993年 「ニライ遭難」、短編集「法師蟬」刊。1994年 「天狗争乱」により大佛次郎賞受賞。1995年 夫妻で岩手県田野村を訪れ、佐渡での講演以来

二八年ぶりに夫婦講演会を行う。
『プリズンの満月』彦九郎山河刊。
1996年 日本文藝家協会副理事長に。野田畑村に吉村昭文学碑ができる。『落日の宴』刊。
1997年 「闇にひらめく」を今村昌平監督が映画化した「うなぎ」がカンヌ国際映画祭で最優秀賞受賞。日本芸術院会員に。

1998年 「生麦事件」刊。
1999年 日本文藝家協会理事長代行に。『アメリカ彦蔵』刊。
2000年 第4回海洋文学特別賞受賞。『島抜け』刊。
2001年 日本芸術院第二部(文芸)部長代行に。『夜明けの雷鳴』「敵討ち」刊。
2002年 短編集「見えない

橋」刊。
2003年 「大黒屋光太夫」刊。
2004年 「長英逃亡」により第7回高野長英賞受賞。日本芸術院第二部(文芸)部長に。
2005年 二月、舌がんの放射線治療をする。『彰義隊』「事物はじまりの物語」「わたしの普段着」刊。
2006年 二月、膀胱全摘の

手術を受ける。退院、自宅療養は、「死顔」の推敲が支えになった。七月、再入院の後、予定を早めて退院、七月三〇日、自らの意志でカテーテルポートの針を抜き、最期の数時間を過ごす。七月三一日未明死去、享年七九。没後、遺作「死顔」(新潮社)、エッセイ集「回り灯籠」(筑摩書房)刊。

●吉村昭著作一覽

『青い骨』青い骨／さよと僕たち／死体／白い虹／無影燈／白衣／昆虫家系(小壺天書房、58・2) ↓ 『無影燈』昆虫家系を「墓地の賑い」に差し替え、角川文庫、73・4 / 五月書房、04・10
『少女架刑』鉄橋／星と葬礼／貝殻／少女架刑／墓地の賑い(南北社、63・7) ↓ 『鉄橋』を「白い道」に差し替え、三笠書房、71・6
『孤独な噴水』講談社、64・9 ↓ 講談社文庫、78・7 / 文春文庫、96・2
『戦艦武蔵』(新潮社、66・9 ↓ 新潮小説文庫、68・10 / 新潮文庫、71・8)
『星への旅』星への旅／石の微笑／鷲／煉瓦塚／少女架刑(筑摩書房、66・8) ↓ 『鷲』

「煉瓦塚」を「鉄橋」「透明標本」「白い道」に差し替え、新潮文庫、74・2
『高熱隧道』(新潮社、67・6 ↓ 新潮文庫、75・7)
『殉国』(筑摩書房、67・10 ↓ 角川文庫、72・8 / 加筆改題「陸軍二等兵比嘉真一」筑摩書房、82・6 ↓ 『殉国・陸軍二等兵比嘉真一』集英社文庫、85・7 / 文春文庫、91・11)
『水の葬列』水の葬列／服喪の夏／身延線(筑摩書房、67・3 ↓ 『服喪の夏』を「彩られた日々」「トラック旅行」「背中の鉄道」「行列」に差し替えて、新潮文庫、76・1)
『零式戦闘機』(新潮社、68・7 ↓ 新潮文庫、78・3)
『大本営が震えた日』(新潮社、68・11 ↓ 新潮文庫、81・11)
『海の奇蹟』海の奇蹟／白い道／野犬狩り／貝の音／透明標本(文藝春秋、68・7) ↓ 『白い道』透明標本を「鷲」に差し替え、角川文庫、74・9)

『神々の沈黙』(朝日新聞社、69・12 ↓ 角川文庫、72・12) / 『神々の沈黙・心臓移植を迫って』と改題、文春文庫、84・12
『彩られた日々』『背中の鉄道』キトク／彩られた日々／母／行列／トラック旅行／青い街／水の匂い(筑摩書房、69・10)
『戦艦武蔵ノート』作家のノート(図書出版社、70・7 ↓ 資料篇を削除し増補、文春文庫、85・8)
『海の壁』(中公新書、70・7) ↓ 『三陸海岸大津波』に改題、中公文庫、84・8 / 文春文庫、04・3)
『陸奥燗沈』(新潮社、70・5 ↓ 新潮文庫、79・11)
『空白の戦記』(艦首切断／顛覆／敵前逃亡／最後の特攻機／太陽を見た／軍艦と少年)(新潮社、70・9 ↓ 新潮文庫、81・4)
『細田』(講談社、70・11) ↓ 『蚤と爆弾』と改題、講談社文庫、75・10 / 文春文庫、89・8)
『麗』麗／蘭鏡／軍鶏／鳩／ハタハタ(新潮社、

71・2) ↓ 新潮文庫、85・7
『人間生活をむしばむもの』(中学生向け公害読本)(東京都公害局、71・3)
『密会』密会／動く壁／非情の系譜／電気機関車／めりー／らうんど／目撃者／旅の記憶／ジジヨメ食った／楢田の柩(講談社、71・4) ↓ 講談社文庫、89・5
『消えた鼓動』(筑摩書房、71・4) ↓ ちくま文庫、86・6
『日本医家伝』山脇東洋／伊東玄朴／土生玄碩／楠本いね／中川五郎治／笠原良策／松本良順／相良知安／荻野きん／高木兼寛／秦佐八郎(講談社、71・8) ↓ 講談社文庫、73・12
『逃亡』(文藝春秋、71・9) ↓ 文春文庫、78・4
『鉄橋』鉄橋／少年の旅／霊柩車／焼香客／遗体引取人／夜の饗宴(読売新聞社、71・10)
『めっちゃ医者伝』(新潮少年文庫、71・11) ↓ 『雪の花』に改稿改題、新潮文庫、88・4
『背中の勳章』(新潮社、71・12) ↓ 新潮文庫、82・5
『総員起シ』『海の柩』総員起シ／鳥の浜(文藝春秋、72・1) ↓ 『手首の記憶』刺刀 増補、文春文庫、80・12
『精神的季節』エッセイ集(講談社、72・9) ↓ 対談一編と『作家のノートI・II』のエッセイ七編を割愛し『月夜の記憶』と改題、講談社文庫、90・8
『海の史劇』(新潮社、72・12) ↓ 新潮文庫、81・5
『下弦の月』下弦の月／探す／手首の記憶／刺刀／炎と桜の記憶／動物園／十点钟(毎日新聞社、73・2) ↓ 『手首の記憶』刺刀を『海の奇蹟』鷲に差し替え、文春文庫、89・5
『深海の使者』(文藝春秋、73・4) ↓ 文春文庫、76・4)

『海の鼠』海の鼠／蝸牛／鶴／魚影の群れ(新潮社、73・5) ↓ 『魚影の群れ』に改題、新潮文庫、83・7)
『関東大震災』(文藝春秋、73・8) ↓ 文春文庫、77・8)
『一家の主』(毎日新聞社、74・3) ↓ 文春文庫、78・8 / ちくま文庫、89・3)
『冬の鷹』(毎日新聞社、74・7) ↓ 新潮文庫、76・11)
『患者さん』エッセイ集(毎日新聞社、74・11) ↓ 『お医者さん・患者さん』と改題調整、中公文庫、85・6)
『螢』(休暇／眼／霧の坂／螢／時間／光る雨／橋／老人と柵／小さな欠伸)(筑摩書房、74・12) ↓ 中公文庫、89・1)
『襟』襟／三色旗／コロリ／動く牙(文藝春秋、75・3) ↓ 『洋船建造』増補、文春文庫、87・4
『北天の星』上下(講談社、75・11、12) ↓ 講談社文庫、80・3)
『漂流』(新潮社、76・5) ↓ 新潮文庫、80・11)
『海軍二事件』海軍二事件／海軍甲事件／シンデモラッパ／海軍二事件調査メモ(文藝春秋、76・7) ↓ 『八人の戦犯』増補、文春文庫、82・8)
『亭主の家出』(文藝春秋、77・3) ↓ 文春文庫、78・9)
『熊嵐』(新潮社、77・5) ↓ 新潮文庫、82・11)
『赤い人』(筑摩書房、77・11) ↓ 講談社文庫、84・3)
『星と葬礼』星と葬礼／煉瓦塚／キトク／服喪の夏／青い街／水の匂い／霧の坂／炎と桜の記憶(集英社文庫、78・1) ↓ 『霧の坂』炎と桜の記憶を「さよと僕たち」墓地の賑いに差し替え、文春文庫、92・5)

『吉村昭自选短編集』海の柩／ハタハタ／螢／少女架刑／海の奇蹟／さよと僕たち／鉄橋／煉瓦塚／コロリ／*九篇の短篇小説と私(読売新聞社、78・1)
『ふおん・しいほるとの娘』(毎日新聞社、78・3) ↓ 講談社文庫「上中下」81・10、11、12)
『海の絵巻』海の絵巻／紫色幻影／おみくじ／光る鱗／緑藻の匂い(新潮社、78・4) ↓ 『鯨の絵巻』と改題、新潮文庫、90・11)
『メロンと鳩』メロンと鳩／風仙花／母／鳥の春／穂藻／風／高架線／少年の夏／赤い月／破魔矢(講談社、78・6) ↓ 講談社文庫、89・8 / 文春文庫、98・4)
『帽子』帽子／買い物籠／牛乳／踏切／朝食／歩道橋／奇妙な旅／雪の日／黒いリボン(集英社、78・9) ↓ 90・2 / 中公文庫、03・9)
『遠い日の戦争』(新潮社、78・10) ↓ 新潮文庫、84・7)
『白い遠景』エッセイ集(講談社、79・2)
『月夜の魚』行列／螢籠／夜の海／黒い蝶／月夜の魚／弱兵／雪の夜／位牌／千潮／指輪／改札口(角川書店、79・8) ↓ 中公文庫、90・9)
『蟹の縦ばい』エッセイ集(毎日新聞社、79・9) ↓ 旺文社文庫、83・8 「親本を少し割愛」中公文庫、93・7 「親本と同じ」
『熊撃ち』朝次郎／安彦／与三吉／菊次郎／幸太郎／政／次郎／耕平(筑摩書房、79・9) ↓ ちくま文庫、85・12 / 文春文庫、93・9)
『ボーツマスの旗』(新潮社、79・12) ↓ 新潮文庫、83・5)
『海も暮れきる』(講談社、80・3) ↓ 講談社文庫、85・9)
『新潮現代文学66・吉村昭』『戦艦武蔵』冬の

鷹／星への旅」(新潮社、80・3)
【冬】の海・私の北海道取材紀行」(紀行エッセイ集)・筑摩書房、80・5↓増補改題「万年筆の旅」作家のノートⅡ」(文春文庫、86・8)
【虹の翼】(文藝春秋、80・9↓文春文庫、83・9)
【歴史の影絵】(歴史紀行)(中央公論社、81・2
↓中公文庫、84・1↓文春文庫、03・8)
【炎のなかの休暇】(蜻蛉／虹／黄水仙／青い水／炎天／白い米／初夏／鯊釣り)(新潮社、81・2↓新潮文庫、86・7)
【実を申すと】(「エッセイ集」(文化出版局、81・3
↓ケイブンシャ文庫、84・5↓ちくま文庫、87・8)
【ともに】(「ノーベル養賢賞」割愛)
【光る壁画】(新潮社、81・5↓新潮文庫、84・1)
【戦史の証言者たち】(毎日新聞社、81・9↓文春文庫、95・8)
【破船】(筑摩書房、82・2↓新潮文庫、85・3)
【遅れた時計】(水の音／駈落ち／笑窪／蜘蛛の巣／オルゴールの音／遺体引取人／遅れた時計／十字架／予備校生／歳末セーブル)(毎日新聞社、82・4↓中公文庫、90・1)
【脱出】(「脱出／焰髪／鯛の島／他人の城／珊瑚礁」(新潮社、82・7↓新潮文庫、88・11)
【間宮林蔵】(講談社、82・9↓講談社文庫、87・1)
【月下美人】(「月下美人／沢蟹／時計／甲羅／秋の虹／夢の鉄道／欠けた月／冬／道」(講談社、83・8↓講談社文庫、90・1↓文春文庫、01・10)
【破獄】(岩波書店、83・11↓新潮文庫、86・12)
【冷い夏、暑い夏】(新潮社、84・7↓新潮文庫、90・6)
【長英逃亡】(「上下」(毎日新聞社、84・9、10↓

新潮文庫、89・9)
【秋の街】(「秋の街／帰郷／雲母の柵／赤い眼／さそり座／花曇り／焰髪／船長泣く」(文藝春秋、84・11↓焰髪／割愛、文春文庫、88・8↓中公文庫、04・8)
【東京の下町】(文藝春秋、85・7↓文春文庫、89・1)
【花渡の海】(中央公論社、85・11↓中公文庫、88・9)
【海の祭礼】(文藝春秋、86・10↓文春文庫、89・11)
【蜜蜂乱舞】(新潮文庫、87・4)
【炎天】(私家版句集、非売品(石の会、87・5)
【闇を裂く道】(「上下」(文藝春秋、87・6↓一冊で、文春文庫、90・7)
【日本歴史文学館 海の史劇・ポーツマスの旗】(講談社、87・7)
【飯糰放】(新潮社、88・4↓新潮文庫、91・10)
【帰艦セズ】(「鉄／白足袋／穀ふる／果物籠／銀杏のある寺／飛行機雲／帰艦セズ」(文藝春秋、88・7↓文春文庫、91・7)
【海馬】(「闇にひらめく／蜻蛉／研がれた角／闘牛／螢の舞い／螢／鴨／銃を置く／熊／凍った眼／錦鯉／海馬／トド」(新潮社、89・1↓新潮文庫、92・6)
【旅行靴のなか】(「エッセイ集」(毎日新聞社、89・6↓文春文庫、92・8)
【死のある風景】(「金魚／煤煙／初富土／早春／秋の声／標本／油煙／緑雨／白い壁／屋形舟」(文藝春秋、89・11↓文春文庫、92・11)
【透明標本】吉村昭自選短編集(「鉄橋／少女架／羽／透明標本／石の微笑／煉瓦塀」(學藝書林、90・3)
【桜田門外ノ変】(新潮社、90・8↓新潮文庫、95・4)
【上下】(95・4)

【吉村昭自選作品集・1】(「死体／青い骨／さよと僕たち」鉄橋／服喪の夏／少女架刑／星と葬礼／墓地の賑い／透明標本／電気機関車／背中の鉄道／煉瓦塀／キトク／星への旅」(新潮社、90・10)
【吉村昭自選作品集・2】(「戦艦武蔵／陸奥爆沈／艦首切断／顛覆」(新潮社、90・11)
【吉村昭自選作品集・3】(「背中の勲章／逃亡／海の極／総員起シ」(新潮社、90・12)
【幕府軍艦「回天」始末】(「短編「牛」併録」(文藝春秋、90・12↓文春文庫、93・12)
【吉村昭自選作品集・4】(「深海の使者／鳥の浜／海軍事件」(新潮社、91・1)
【史実を追う旅】(「エッセイ集」(文春文庫、91・2)
【吉村昭自選作品集・5】(「高熱隧道／赤い人／船長泣く／焰髪」(新潮社、91・2)
【吉村昭自選作品集・6】(「海の史劇」(新潮社、91・3)
【吉村昭自選作品集・7】(「ポーツマスの旗／破船」(新潮社、91・4)
【白い航跡】(「上下」(講談社、91・4↓講談社文庫、94・5)
【吉村昭自選作品集・8】(「長英逃亡」(新潮社、91・5)
【吉村昭自選作品集・9】(「海の祭礼／礁／コロリ／欠けた腕」(新潮社、91・6)
【吉村昭自選作品集・10】(「冬の鷹／海も暮れくる」(新潮社、91・7)
【吉村昭自選作品集・11】(「黒風／ハタハタ／海の嵐／魚影の群れ／海馬」(新潮社、91・8)
【吉村昭自選作品集・12】(「遠い日の戦争／破獄」(新潮社、91・9)
【黒船】(中央公論社、91・9↓中公文庫、94・6)

【吉村昭自選作品集・13】(「冷い夏、暑い夏／飯糰放」(新潮社、91・10)
【吉村昭自選作品集・14】(「身延線／行列／風／毒／破魔矢／初富土／月下美人／炎のなかの休暇(蜻蛉／虹／黄水仙／青い水／炎天／白い米／鯊釣り)／沢蟹／欠けた月／冬／道／白い壁／飛行機雲／標本／油煙／緑雨／煤煙／屋形舟」(新潮社、91・11)
【吉村昭自選作品集・15】(「水の葬列／他人の城／休暇／月夜の魚／メロンと鳩／少年の夏／鳥の春／鳳仙花／雲母の柵／帰郷／脱出／さそり座／穀ふる／鉄／白足袋／チロリアンハット」(新潮社、91・12)
【吉村昭自選作品集・別巻】(「東京の下町／文学アルバム／自筆年譜／著書目録／著作年表」(新潮社、92・1)
【少年少女古典文学館 11・12 平家物語】(講談社、92・6、7)
【私の文学漂流】(「自伝」(新潮社、92・11↓新潮文庫、92・4)
【私の引出し】(「エッセイ集」(文藝春秋、93・3
↓文春文庫、96・5)
【法師蟬】(「海猫／チロリアンハット／手鏡／幻／或る町の出来事／秋の旅／果実の女／法師蟬／銀狐」(新潮社、93・7↓新潮文庫、96・6)
【ニコライ遺囑】(岩波書店、93・9↓新潮文庫、96・11)
【昭和歳時記】(「エッセイ集」(文藝春秋、93・11
↓文春文庫、96・10)
【天狗争乱】(朝日新聞社、96・5↓新潮文庫、97・7)
【プリズンの満月】(新潮社、95・6↓新潮文庫、98・8)
【彦九郎山河】(文藝春秋、95・9↓文春文庫、

98・9)
【落日の宴】(勅定奉行川路聖謨」(講談社、96・4↓講談社文庫、99・4)
【街のななし】(「エッセイ集」(文藝春秋、96・9
↓文春文庫、99・9)
【再婚】(「老眼鏡／男の家出／再婚／貸金庫／湖のみえる風景／青い絵／月夜の炎／夜の饗宴」(角川書店、95・3↓角川文庫、98・1)
【朱の丸御用船】(文藝春秋、97・6↓文春文庫、00・7)
【遠い幻影】(「梅の蕾／青い星／ジングルベル／アルバム／光る藻／父親の旅／尾行／夾竹桃／桜まつり／クルーシング／眼／遠い幻影」(文藝春秋、98・1↓文春文庫、00・12)
【わたしの流儀】(「エッセイ集」(新潮社、98・5
↓新潮文庫、01・5)
【生妻事件】(新潮社、98・9↓新潮文庫「上下」02・6)
【史実を歩く】(「文春新書、98・10)
【破星】(「飲み友達／喫煙コーナー／花火／受話器／牛乳瓶／寒牡丹／光る干湯／破星」(中央公論社、99・2↓中公文庫、02・11)
【天に遊ぶ】(「蜻蛉／同居／頭蓋骨／香袋／お婆さん／梅毒／西瓜／読経／サーベル／居間にて／刑事部屋／自殺／心中／鯉のぼり／芸術家／カフエー／鶴／紅葉／偽刑事／観覧車／聖歌」(新潮社、99・5↓新潮文庫、03・5)
【わが心の小説家たち】(平凡社新書、99・5)
【アメリカ力産威】(読売新聞社、99・10↓新潮文庫、01・8)
【夜明けの雷鳴】(「医師高松凌雲」(文藝春秋、00・1↓文春文庫、03・1)
【鳥抜け】(「鳥抜け／欠けた腕／梅の刺青」(新潮社、00・8↓新潮文庫、02・10)

【私の好きな悪い癖】(「エッセイ集」(講談社、00・10↓講談社文庫、03・11)
【東京の戦争】(「エッセイ集」(筑摩書房、01・7
↓ちくま文庫、05・6)
【シリウス古典3・吉村昭の平家物語】(講談社、01・10 *少年少女古典文学館 11・12 平家物語」の再編集)
【敵討】(「敵討／最後の仇討」(新潮社、01・2↓新潮文庫、03・12)
【見えない橋】(「見えない橋／都会／漁火／消えた町／夜光虫／時間／夜の道」(文藝春秋、02・7↓文春文庫、05・7)
【縁起のいい客】(「エッセイ集」(文藝春秋、03・1↓文春文庫、06・1)
【大黒屋光太夫】(「上下」(毎日新聞社、03・2↓新潮文庫、05・6)
【漂流記の魅力】(新潮新書、03・4)
【川尻浦久蔵】(「非売品(川尻町立川尻小学校PTA、04・3)
【事物はじまりの物語】(ちくまプリマー新書、05・1)
【影義隊】(朝日新聞社、05・11)
【わたしの普段着】(「エッセイ集」(新潮社、05・12)
【死顔】(「ひとすじの煙／二人／山茶花／クレイ スロック号遭難／死顔」(新潮社、06・11)
【ひとり灯籠】(「エッセイ集」(筑摩書房、06・12)
【ひとり旅】(「エッセイ集」(文藝春秋、07・7)
【歴史を記録する】(「対談集」(河出書房新社、07・12)
*木村暢男編「吉村昭年譜」(平成18年版など)を参考にさせていただいた。(文責編集部)